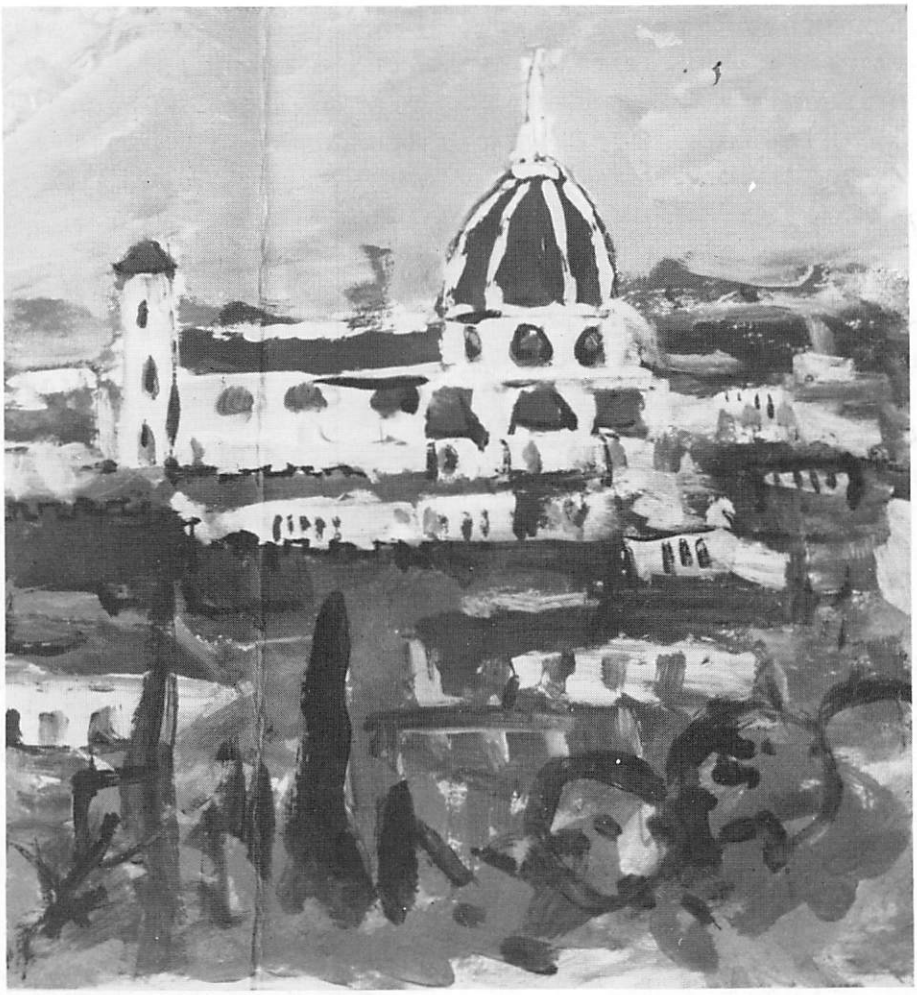
第8号
昭和61年2月

会　報

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011－644－4025



ミケランジェロ広場からフイレンツエ市内を望む　小木榮憲氏作品

ミラノひとり歩き

小　木　榮　憲（会員）

ブレラ美術館附近をうろついていたら遇然にも画材店があった。角の小さな店で今まさに店を閉める気配である。何の目当もなく入ってみたが、何か買はないと悪いような気がして、身振り手振りで７Ｂを買って外に出る。戸外に出る時が１番道を間違い易い。わけても角店の時は注意しなければいけない。ブレラ美術館に来る時バスの中でみた木立のあった場所はこの方向だと思い、ドウオモの反対方向を真直ぐに歩いた。なかなかみあたらない。どこをみても描きたいところばかりだ。三角州になって古い木が５・６本あり、露天の本屋や電話ボックスのあるところに出た。この辺の街並や屋根が面白いと思って２・３枚スケッチして簡単に彩色した。そして又一直線に絵地図を描き乍ら歩く。パリで１度ひどい目にあったものだから１人歩きのときは必らず絵地図を描いて歩くことにしている。勿論地図とホテルカードは持って、万一の時はタクシーで振出しに戻る考えである。少し休みたくなりレストランにこわごわと入って、コーヒー、コーヒーと繰返して呑む格好などしたらボーイも何とはなしにわかったのか持ってきた。そのボーイの似顔を描いてやったら喜こんで、スケッチを高く揚げて他の客にみせてご満喫そうであった。僕の絵もミラノに１枚残ることになった。たいしたものだ。

暫く又直線に歩いたところに地下鉄があった。ＭＭとある地下鉄に入ってみる。無人駅で改札口は札幌の方が立派で奇麗だ。こちらは古くて汚れている。アルプスに雪が降ったとかで寒い。駅は暖かでよかった。売店や駅の様子等をスケッチしてそろそろ帰ることにした。同じ方向に出口が二つもあって何だかややっこしい。ああこの角の洋服屋のところを行けばよいのだ。来た時より街の中は店が開いていて人通りも多くざわめいている。調子にのってキョロキョロ店の中やウインドを覗き込み乍ら人の流れにつられて歩いた。そろそろ三角州のところにくる筈だがなかなかこない。変だナ……一寸様子がおかしいぞ。この先かナ……又一寸歩く、いやどおも変だ。段々と穏かでなくなった。胸騒ぎがしてきた。そろそろ暗くなりかけてきたようだ。これはいかん……大急ぎで元の地下鉄に戻って、絵地図と合せて入念に調べた。其処は道路が７本も集まって放射状で、地下鉄の出入口も幾つもある。１本道路を間違うととんでもない方向に行ってしまう。それに似たような店が並んでいる。あの洋服屋の左の道だ。そうだこの道だったんだ、とこんどは慎重に歩き出した。間違いない。写生どころではない。300メートルも歩いたろうか、先刻スケッチをした三角州にくることが出来た。それからブレラ美術館迄は絵地図と全く同じで何の不安もなかった。画材店もあった。

迷うということは、よく覚えるものだ。今でもあの辺は懐つかしくよく覚えている。あの時の困った顔、ホットした時の顔はどんなだったろうか。

地家学芸員の解説
フイレンツエ・ウフイッツィ美術館にて

ガウディに魅せられて

若　林　喜美子（会員）

今、私は思いもかけず、バルセロナの街に立っています。一昨年末に観た映画「アントニオ・ガウデイ」で彼の作品に出会って以来いつかは訪ねてみたいと、心に念じていたその街に、こんなに早く訪れることが出来ようとは、思いも及びませんでした。

11月中旬のバルセロナは薄曇り、ちょっと肌寒く晩秋の気配。ホテルを出て、ひよいと街角を曲ると、そこには「カサ・バトロ」や「カサ・ミラ」のガウデイ独持の曲線で形どられた建物や、おどろおどろしい「聖家族教会」（サグラダ・ファミリア）が、そしておとぎの国の様な「グエル公園」爬虫類の体内を思わせる「地下聖堂」等が、何の不自然さも無く街並の１部として静かな佇まいを見せています。

私には、今度の旅行に一つの目的がありました。それは、出発前に読んだ本の中で印象に残っていた事で、聖家族教会の尖塔に登ると、下からは魚鱗の様に見える出っ張りが、一つ一つ、外光を取り入れる窓になっていて、そこから集められた夕陽が、１本の柱になり塔の尖端から天空に向けて立ち上るという劇的な場面で、ぜひ自分の目で確かめてみたいと思ったのでした。

翌日は快晴。午後の自由時間、地家学芸員、石井さん、後藤さん、息子と私の５人は、日曜日の賑いを見せるランブラス通りをぶらついて、これもガウデイ建築のグエル邸を捜したり、土産物屋を覗いたりしているうちに、他の３人とはぐれてしまいました。

最終的には５人で聖家族教会の夕陽を見に行くことになっていたので、息子と私も歩いていくことにしました。地図の上では大した距離ではなさそうなのに、なかなか目的地に着きません。時間ばかりどんどん経ってゆきます。急がないと折角の夕陽が沈んでしまいます。やっとタクシーをつかまえて、大急ぎで教会の内部に駆け込むと、丁度エレベーターが扉を開けてくれ、一気に112メートルの尖塔の頂上まで送り届けてくれたのでした。

時間はすでに５時半に近く、夕陽は山陰に沈み、眼下に広がる街並は紫色の夕闇に包まれはじめていました。

塔と塔を結ぶ架橋に出て、あまりの美しさに２人共、茫然と下界を見下している時、やっと下から登ってきた３人に再会しました。エレベーターは私達が乗ったのが最終便だったらしく、３人は仕方無く階段を登ってきたとのこと。外はすっかり暗さを増して、藍色の空に三日月が浮んでいます。

突然、鐘の音が尖塔にこだまして鳴り始め、時計を見ると丁度６時。５人は言葉もなく立ちつくしていました。すぐ目の前に、モザイクで彩色された塔の尖端があります。夜が、すっかり街を包み込んで、無数の車のライトが光の波紋を描いています。

感動とも、恐れとも知れぬ感情が、ゾクゾクと足もとから頭の天辺まで突き抜けて、いつの間にか涙ぐんでしまっているのでした。

下りは難行苦行でありました。直径５メートル程しかない円塔の内部に出来ている螺旋状の石段は、まるで地獄か、はたまた天国へでも通じる階段のごとく、人影も無く暗黒の中にひっそりと静まりかえっています。人、１人がやっと通れる狭い石段を一歩一歩踏みしめて降りていると、どこからか神の声で「汝、悔い改めよ。くいあらためよ」と諭されているような気分になってきます。

時々、息子がともすライターの明りが、何と心強く、頼もしく思われたことでしょう。地上におり立つと、目が回ってどうしても真直に歩けないほどでした。

このサグラダ、ファミリアは、1883年着工以来100年。ガウデイが73才で不幸な死をとげてからも、すでに60年の歳月を経ながら、今だに建築中で、これからどれ位いの年月を要するかは全く未定であります。

地下室には彼の作った完成時の模型があり、それによると18本の高塔が回廊で結ばれています。建築資金は全て世界中の信者からの寄進でまかなわれているとの事。私も財布の底に残っていた百円玉をいくつか、基金箱に落しました。

ホテルへ帰る道すがら見つけた、小さなレストランで、身振り手振りで注文した。うなぎの稚魚や、名も知らぬ魚貝類の料理の、何と美味であったことか。１日中歩き回った疲れも一遍に吹きとんでしまいました。

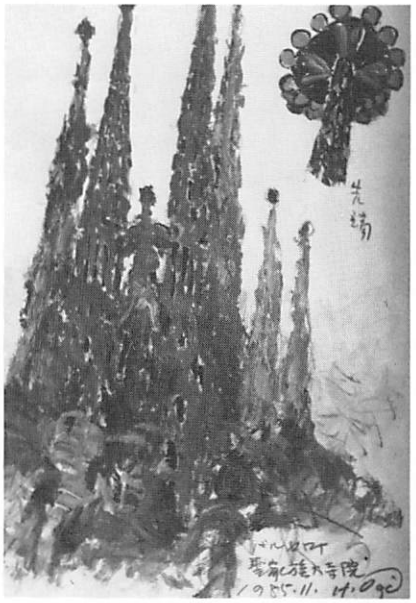
又、いつの日にかバルセロナを訪れて、サグラダ・ファミリアの夕陽を見ることが出来るでしょうか。それでも私達は、とても幸せな気分でホテルへ戻ったのでした。

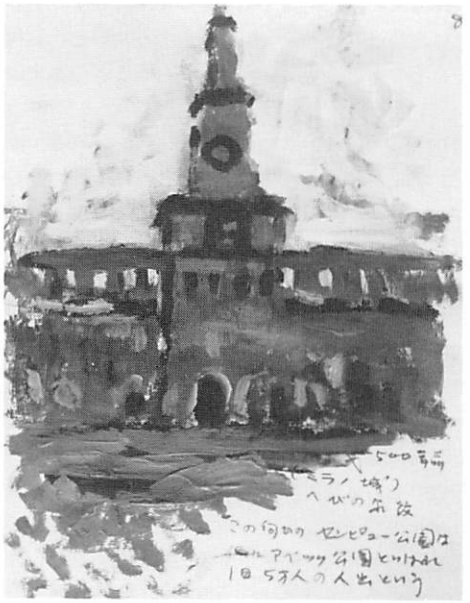
海外旅行記

海外美術研修旅行

毎年好評を博している当会のツアーも第6回となり、今年は「晩秋のヨーロッパ美の探訪」と銘うつて募集案内したところたちまちに定員40名に達しました。11月15日から24日までの10日間の旅で小杉理事を団長として、コーディネーターには道立近代美術館学芸員地家光二氏の同行をお願いし無事に素敵な旅を終えました。

今回は、天才ガウデイの街バルセロナと中世イタリアルネッサンスの旅（見学した所はピカソ、ミロ、ブレラ、ウフィツィの各美術館とダヴインチ博物館です。）でしたが、特にスペインの天才建築家ガウデイーの作品は参加者に強烈な印象と感銘をあたえたようです。





グエル公園にて／バルセロナ

忘　年　会

工　藤　欣　弥（参与）

美術館の忘年会は、１泊で支笏湖の丸駒温泉に出かけた。

場所は、全員の希望をきいて決められた。アンケートの回覧がまわって来て、定山渓、登別、朝里川、支笏湖のうち、行きたいところにマルをつけなさいと……ある。

私はだいたいが１泊忘年会に反対であった。何十年もの間、出張出張で宿には泊まりあきている。旅館やホテルなどといったって、しょせんは部屋があって寝床があるだけの話である。風呂につかって酒を飲んで寝るだけなら、わが家でも同じではないか。そんなことに高いお金を払うぐらいなら、ススキノあたりで盛大にやって、豪勢なおみやげでももらって帰ったほうがよっぽどいい。などと胸のうちでつぶやいていたが、しかし館員の半分を占める女性たちは、日ごろ旅館に泊まるなどという機会のきわめて少ないことを考えれば、そんな個人的事情で計画をまげさせるわけにもいかない。

アンケートには、まず定山渓は「もうあきた」と書いた。本音である。朝里川は「なんにもなさすぎる」と反対。登別は「遠すぎる」。残ったのは支笏湖だけだから、これにマルをつけるしかない。ほかの館員はどうだったのか。結局、支笏湖丸駒温泉に決定した。

真駒内から石山を経て道道支笏湖線に入ると、対向車も少なく雪の白さが目にあざやかだった。それに丸駒温泉は意外に近くて、１時間とちょっとの行程であった。札幌から１時間も走れば、こんないいところに来れるという自画自賛的満足感があった。

冬の支笏湖は湖面に浮かぶ舟ひとつ見えず、カモの群れが静かに羽根をやすめていた。月曜が休みの美術館の特殊事情で、日曜の夜の１泊であるが、それがかえって幸いして、昨夜は忘年会で満員でしたという旅館も、ほとんど全館貸切りみたいに、ほかの泊まり客が少なかった。

露天風呂があって、しかも行儀よく男湯と女湯と、湯壷が２つに分かれている。小奇麗な脱衣場もついている。粉雪のちらつく中で裸になるのはいささか勇気がいったが、ここまで来て入らぬてはないと、勇を鼓してとびこんだ。これが快適なあったかさで、冬ざれの湖面を眺めながらの、野趣満喫の小原庄助さんであった。美女諸君も、とにかくこの露天風呂には満足の体だった。

夜の忘年会の途中で、Ｙさん考案の「三岸美術館歳忘れ大スゴロク」で遊んだ。諸処方々に落とし穴がいっぱいあって、それがいちいちユーモアに富んで腹をかかえて笑いこけるので、なかなか上がらない。女中さんに催促されてスゴロク半ばで宴会の幕をしめ、部屋に戻って全員での二次会に及んだ。

翌朝は食事のあともゆっくり休んで、お昼を食べてから旅館を出た。車で１時間、もう札幌である。こんなに近くに、という感想がまた湧く。札幌に住むことの、特権のようにも思えた。

１泊つき忘年会も悪くはないと、いつかすっかり宗旨がえをしてしまっていた。

（北海道立三岸好太郎美術館長）

「歳忘れ大スゴロク」ゲーム

随想「春の音」

＝「創造としての企業集団・地域」を出版して＝

北　島　吉　光（理事）

「旭川」・暮れ近い11月末には早い冬が訪れた。雪も多く、寒さも冬の入口とは思えない速度で、マイナス日が続いた。気象予報では暖冬ということであったから、そのつもりでいた、それが、いきなり厳冬入りだから驚ろいてしまった。

昨年２月。昭和30年から昭和50年なかば頃までの新聞、雑誌、講演等で発表していた手もちの原稿から「地域社会での業界組織」特に旭川家具産業を中心として実践した「集団・共同・協業」・の理論。「地域」・を中心に行動した。林産資源の活用「家具づくり」・とその学問的な論理の確立をねがって、くわだて誘致した大学づくりの背景など「産・学」そして「官」などを横に連動させながら「家具創りと文化について」実験したことがらを一冊の本にまとめようと考え、かなりな量の原稿から、えらびだす作業に追われていた。

11月末日の出版記念会の当日までは緊張の連続であった。７月末日にそれなりに原稿を整頓して、監修をしてくれることになっている、二男の宇都宮大学教養部助教授北島滋（社会学）のもとにおくる手筈をととのえ、やっと一息ついたものの、生れつき悪文悪筆のうえ、文法なども無視して書いている内容をどうやって整理してもらえるか心配でならない。宇都宮から早速電話があり、「こんなひどい文章をどうやってまとめるか、大変な作業になる」と文句のでる始末である。「切り捨ては御自由」ということで頼みこんではみたものの、昭和30年から50年と、その経過のなかの記述部分には、内容の折り重さなっている箇所か多くあり、それを一つの流れにむすんで読みやすいものにしあげることじたい、無理なことである。「できるだけ、まとめてくれ」ということになる。

出版社については、社会科学関係の書籍を出版している「時潮社」の２代目社長さんを、名古屋大学社会学部北川隆吉教授に紹介していただき、序文は一橋大学商学部長今井賢一教授に無理やりお願いした。著名な学者のお２人には本当にお世話になったと深謝している。

北川教授とは随分長いおつきあいである。15年以上ということになろう。「企業集団」の実験を知っていて、そんなこともあって二男が門をたたいたことから始まっている。

今井教授とは７年ぐらい前に陋屋を訪れてからということで、やはり「家具創りと企業集団」の実験に興味をもち調査におい出になっていらいということである。

筑摩書房より、日本の産業第四巻「地域からの産業論」共編と、1983年筑摩より刊行された「日本の産業社会」で、集団、共同、協業についてふれていて、やはり「集団」実験にまとわる知己ということになる。今回は出版についても、記念会でも人さわがせをしすぎてしまった。あまり、人に迷惑をかけない「主義者」にとっては、心に負担が重くのしかかる。

今年は雪の量が近年になく多い。地域によって、平地で２メートルをこえるという、雪の重みもまた心に加重してくる、早く雪解けがこないか、ひそかに思うことがある。雪が消えればなんとか、この重さから解放されるのでなかろうかと、そんなことを考える。書斉の窓は、雪にうもれてしまい、北の冬のきびしさがせまってくる。春の音はかなり遠い。白一色の世界である。

グランドキャッシエの豆腐

繁　富　文　承（理事）

山本理事より、〝北海道美術館協力会〟という社団法人があり、是非会員として協力してもらえないだろうか？というお誘いがあり、入会してから、はや１年半ばを過ぎました。おかげさまで、今迄、ほとんど興味を示すことがなかった美術の世界におそるおそる一歩ふみ出した状態であります。今後共、よろしく御指導の程お願い申し上げます。

今年の１月の半ば東京へ出張した。千歳より羽田への飛行機（ＪＡＬ）の中で WINDS　１月号のページを退屈にまかせてめくっていたところ、〝ロッキー山中の炭鉱に生きる斉藤昇さん〟という題目に目が止まった。その記事を読み、写真を見ていると、昭和48年にこの町を訪れ、約40日間お世話になった時のことが、走馬燈のごとく頭の中に思い出された。私が、大学院を出て、30才過ぎて日立製作所日立工場蒸気タービン設計部に勤務するようになったのが、昭和47年であった。入社してから１年もたたない内に、カナダへ出張命令が出た。仕事もまだ慣れてもいない者に出張とは何事か？と思ってはみたが何とかなるだろうと思い羽田を出発した。

行先はエドモントン西方約 500 ㎞に位置しているグランドキャッシエという当時人口 3,000 人の小さな町であった。その町より車で20分程度のところに炭鉱があり、その炭鉱のそばに、日立製作所が納入した蒸気タービン発電設備をもつヘンリーミルナー発電所があった。私の仕事は、その設備の引渡し試験を実施する事であり、毎日毎日ホテルと発電所の往復であった。そのような時に、声をかけてくれたのが、前述の斉藤さん以下７～８名の日本人であった。こんな町にも日本人がいるのかと始めは思ったが、よく聞いてみると、北海道の炭鉱で働いていた人々であった。私も北海道産であるということから、連日、誰かかれかの家へウイスキーをさげ遊びに行った。彼らも日本人に飢えており、特に最新の北海道の情報には目をかがやかせて聞き入っていた。

ある日、明日は大変なご馳走が来るので是非来いという話があり喜び勇んで、当日お伺いした。卓上にはいつもと変らないご馳走が、並んでおりその一隅の小さな皿の上に２㎝立方に切られた豆腐がのっていた。日本からきたばかりで私にとっては別に豆腐がめずらしいと感じていたわけではなかったが、彼らにとっては、大変な貴重品であったのである。グランドキャッシェでは、当時、２、３ケ月に１回エドモントンより、日本料理店の店主がわざわざ運んで来てくれるとの事であった。値段の方もくわしく聞くわけにもいかなかったが、日本の 5.6 倍はしているとの事。このような貴重なものを食べることが出来ず、だまって、皿を子供達の方へ動かし子供達に食べてもらった。今では、簡単に出来るインスタント豆腐もあると聞いているが当時はそのようなものもなく、苦労して入手していることを聞くにつれ、日本品に対するあこがれが、我々が考えているよりも、非常に強いものであると感じた。

彼らは、西独炭鉱から、カナダ炭鉱へと移っていき、はたして自分達の進路が正しかったかどうかということで非常に迷っていた時であった。生活環境は、すばらしく良く、当時の日本の炭鉱マンの生活レベルからすれば格段の違いが感じられ、その表情も明るかった。当時、私の岳父が知事をしており、北海道人が大活躍のことで色紙をお送りし、そのお世話になった感謝と、今後の奮闘をお祈りした。

偶然にも今年１月に見た写真では、表情の明るさは元道り、元気に暮していることを拝察し、たった２㎝立方の豆腐の思い出と共に、なつかしさのあまり、もう一度、すぐカナダへ行きたい衝動にかられた。

北にのびる稲作

青　木　　弘（会員）

「こんなに良い絵の具を使っていたら、絵は上手にならないよ。」

これは、日本画家の尾山巌さんが、後輩である釧路湖陵高校の美術部の生徒に話した言葉である。

卒業50年を記念して母校を訪れた尾山さんは、美術部の生徒に何か話をして下さいという私の願いに応えて、放課後美術室でクラブ活動をしている後輩に対して、たった一言この言葉を残して帰られた。口の重い方なので、これが精いっぱいの努力であったようだ。生徒たちはこの言葉の意味がわからず、ただ大先輩である有名な画家の顔を眺めていた。

別室で私は、この言葉の意味をお尋ねしたが、先方は寡黙な芸術家であり、こちらは饒舌な非文化人なので、結局はっきりしなかった。私の推測では、「値段の高い良い絵の具を使っていると、その絵の具の力で上手になったように錯覚する。基礎を磨く時代は、そんなごまかしはしない方が良い。自分の力がそのまま表現される道具を使って勉強し、力がついたら良い絵の具を使ってお化粧をしなさい。」ということのようであった。あとでこのことを美術部の生徒に話したら、その反応はよくなかった。

「私は将来画家になるつもりはありません。今画いている絵が私の生涯の最後の絵になるかも知れないので、最高のものを書きたい。」

「将来は将来、今を大切にしたい。」

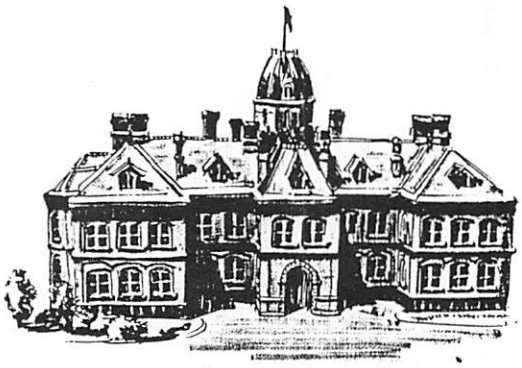
「高校文化連盟の作品展に出品し入賞するためには、今ごろ基礎を勉強しては間に合わないのです。お化粧せざるを得ません。」

つまり、大家は自分の若い頃のことを考えて反省しているが、今の若者には今日を大切にしたいというギャップがあるのであろう。

現在の高校のすべては学習にこれに似た現象がある。本来高校で勉強することをきちんと勉強し、将来大成するための努力をしていると、いわゆる一流大学の入試に合格することは難かしい。大学入試にはそれなりの効果があり、すべて無駄なわけではないが、人間を作るという意味では検討を要することが多い。高校スポーツの中でも人気のある野球にしても、金属バットを使用するようになってから、基礎に忠実な練習が減って、腕力をつける風潮が強くなった。木製のバットでは、ボールをバットのしんでとらえなければ良い当たりがしなかったが、金属バットでは腕力があればしんで打たなくてもホームランになる。木製バットが折れ易く、経費がかかるので金属製にしたのだが、最近は飛ばすために使っていると誤解している人がいる。私のようにきめ細かい高校野球を好む者にとっては、現在の姿に抵抗を感ずるがこれを時の流れと片付けてよいのだろうか。

道庁赤れんが庁舎の階段の踊り場に「北にのびる稲作」という尾山さんの絵が飾られている。この絵を見る度に、尾山さんの言葉に従って時の流れに抵抗すべきかどうか迷っている自分を、なさけなく思っている。

（札幌丘珠高校長）



大　津　絵

仲　村　参　郎（会員）

1月半ばすぎ上京の機会があり、仕事の合間をみて、駒場の日本民芸館に足を運んだ。同館の創立50周年を記念しての特別展の一つ＜大津絵＞を見たかったからである。

前に一度訪ねたときは道に迷ったので、今度はよく調べて、地下鉄千代田線、銀座線と乗りつぎ、渋谷から井の頭線、2つ目の駅、駒場東大前で下りて歩いて5、6分、閑静な住宅街の一角にある民芸館はすぐわかった。都心の丸の内から約40分である。

昔の武家か豪農の屋敷を思わせる日本民芸館は、柳宗悦の提唱で昭和11年秋に設立され、その後、浜田庄司、柳宗理と館長は代ったが、一貫して民芸の美を追って50年を経てきた。

入館料700円を払って、受付の老婦人から2階の奥の部屋からご覧下さい、といわれて吹き抜けの階段を上る。

私の亡父の出身が滋賀県（東浅井郡浅井町）なので、以前から大津絵に関心はあったが、こうして何十枚も初期から中・末期まで見るのは初めてである。

宗悦によれば、大津絵は寛永の頃（1630年前後）が発祥で、京都から大津の間の街道筋の追分や大谷で売られた旅のみやげものであったという。面白いと思ったのは、この街道は当時京へ上る人下る人で大変にぎやかで、中でも名物のみやげが3つあった。1つは、ぬい針・くけ針・畳針の針、次に算盤、第3に大津絵。この大津絵が全くの手みやげで、誰にでも買える値段の安い三文絵だったという。

＜大津絵の筆の始めは何佛＞という芭蕉の句のように、初期のものは佛画からはじまった。その後、元禄の頃から盛期となり佛画が消えて、藤娘、鬼の念佛といった世俗画だけとなり、それも風刺から教訓（道訓）、迷信（まじない）と転化していった。後になって、鬼の念佛が子供の夜泣きの護符となった例がある。

画風は、一般的に初期は略画ながら品格があった。それが中期にはやや粗雑になり、漫画的になってきて、末期になると全く冗談画に堕した。

さて、2階の比較的広い部屋の壁を飾る大津絵は、初期の佛画と大名の武具飾りの極彩画であった。佛画の阿弥陀にしても、来迎三尊佛にしても、お顔がまことににこやかで庶民的であるし、また、庚申会の本尊である青面金剛童子が数枚、どれも上部に陽と月と、下部左右に猿2匹と雞2羽が描かれていて興味深い。また、閻魔もその1つという十王図。冥土で亡者をさばく血の池や針の山の地獄絵だが、この王たちの顔が怒っていてもなんともユーモラスであるのも、当時の庶民たちに人気があったのではあるまいか。

廊下に出ると、沢山の絵馬札と、盛期の世俗画が掛けられ、藤娘、鬼の念佛、鬼の三味線、鬼の行水、瓢箪鯰、太夫、若衆、雁金文七、槍持奴など、とくにもてはやされたものが絣の布地で表装されている。これらは　泥絵具で黒と朱と白堊りが主で、それに淡い緑と黄泥が使われている。また別の小部屋には、教訓を添書きした中期以降のものが法帖式に展示されてあった。

全体を通じて、なんといっても簡素化された絵が美しい。稚拙というか古拙な美しさが素晴しい。無名の職人たちが、無心に無邪気に、流れるように大量に線を描き、同じ色付けをする。そのことが技巧も作為もない美しさをたくまずして残したといえる。

宗悦は＜大津絵の筆の跡にはためらいがない。躊躇のない筆の勢いが画をこの上なく美しくさせている＞と書いているが、まさにそのことが、実物を沢山見て私の心に納得するものがあった。

大津絵を見たあと、別のいくつかの小部屋で、木喰上人の自刻像や、浜田庄司、河井寛次郎の皿や壺をみて、心満ち足りて民芸館をあとにしたのであった。

鬼の三味線　日本民芸館提供

ESSAY

プラタナス

鶴　田　玲　子（会員）

今年の札幌は雪が多い。道の両側に積った雪が、人の背丈を越すところもある。

金沢あたりでは、木の実の生りの良い年は大雪になる、という言い伝えがあるそうだ。そういえば、去年の秋は、ナナカマドが早くから真っ赤に色づいて鈴生りだったなあ、と思いあたる。今でもその赤い実が落ちもせず雪を被って、何ともいえずきれいだが、この沢山の実は大雪の前ぶれであったのか。

そう思って見まわすと、並木のプラタナスも葉のない枝に、まるい実をいっぱいぶら下げている。中には、１つ２つ残った実が、懸命に風をかわして揺れている木もある。この実を見ると、中学の頃の帽子につけていた毛糸のぼんぼりを思い出す。毛糸を多く使うと、むっちりしたいい玉になる。それを自分で作っては、帽子や手袋の飾りにした。

プラタナスの実の中は何が詰っているのか気になって、梢を見上げて歩く。１つ位取れそうに思うが、枝は意外に高くてちょっと跳んでみても届くものではない。それに、いいおばさんがプラタナスの実に跳びつくところなど、あまり人に見られたくないことである。いい具合に雪の山が踏台になって、やっと１つ実を手に入れた。褐色の球体は小さな棘で覆われていて、軽く、固い。丈夫な柄は20糎もある。胡桃割り人形に挟んで割ると、音もなく凹んで、黄色い綿毛が湧き出してきた。実は棘の数だけの沢山の種子の塊だった。プラタナスの実は、何かの力で割れると、種子は傘状の綿毛で空へ飛ぶ仕組らしい。

この木は欧州西南部が原産と聞いたが、去年の初夏、西ヨーロッパの街々で見たプラタナスには圧倒された。スペインのバルセロナでは、大きな通りの両側から並木がアーチのように覆い被さり、はるかに高い梢のプラタナスの葉の間から、濃い緑の実が揺れていた。私はコロンブス記念柱の前で、若いジプシー女に危うくコインを巻き上げられそうになったばかりだったから、ランブラス通りの見事な並木を見上げるのにも、バッグをしっかり抱え込んでから、やおら、呆然と立ち尽くすのだった。

わが町内のプラタナス並木は、大きい木でもせいぜい２階の屋根を越すていどである。大人の腕ほどの枝が、中途から思い切りよく伐られていて、剪定のしすぎではないかと心配になる。伐られた枝から細い枝が、空に刺さるように突き出て、それは、ビユッフェの絵を思わせる風景でもある。

去年の11月、協力会の「美の探訪」の旅に参加した方に、旅行中の写真を見せていただいた。スペインのバルセロナでのスナップの中に、プラタナスの木が写っていた。すっかり葉を落した枝に、いくつもの実をぶら下げて立っていた。裸木になっても木の姿が立派だと、懐しい思いで写真に見入った。

美術館との出合い

札幌白石高校二年
佐々木　　寛

僕が初めて美術館へ行ったのは昭和54年、小学５年の時である。少年野球に明け暮れ、日曜祭日なしの早朝練習と試合の連続だった。ある日、貴重な休日が１日だけとれることになった。「いい所へ連れて行ってあげるネ」と母に云われたのが道立近代美術館であった。

僕が幼い頃から絵が好きだったからだろう。

びっくりした。やたら天井が高く薄暗い中にいろんな絵が飾ってあった。頭がボーッとした感じだった。観終って母が僕に聞いた。「きょう観た絵の中でどれが一番好きだった？」「……朝の祈りだよ。それと馬の絵、それからニシンの干してあるのもすごいネ。」「ワアーッ偶然!!おかあさんも同じ絵だよ。初めて来た記念にこの絵ハガキを買って行こうネ」この時から行く毎に売店で買った。（室内風景）のデコパージュは今でも僕の部屋に飾ってある。

必ずレストランで食事をするのも楽しみの１つになっていた。そして「大人になった時、ここで食事をした事を覚えていて思い出してネ」と云った。

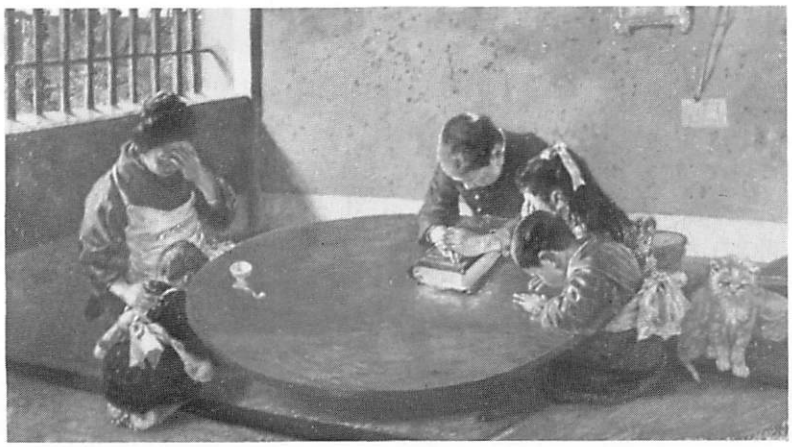
中学１年の夏休み30度をこえる中、立通しの汽車にゆられて旭川美術館へ行った。ほんの少しの時間しかなかったけど常盤公園を通り橋を渡って神社でお参りをした。駅弁を買ってもらって食べた。

僕は今でも野球をしている。だから最近美術館へはあまり行っていない。今年の夏休み前に野球は終るのでこれからは観に行けるだろう。

誕生日のプレゼントに美術館の学生会員証をもらった。２回目である。10年前からパートで働いている母は土曜日が来ると、「きょうは㊗だからおねがいネ!!」と嬉しそうに出かける。そしてガラスのコップを買って来ては、人にあげている。

おまえが大きくなっていろんな土地へ行った時、なるべく時間を作って、その街の美術館へ行くようにしなさい。そこで今迄新聞や教科書で見た絵の本物に出合うことが必ずあるだろう。その時、本物のすばらしさに改めて感動することだろう。」

母の口ぐせである。



「朝の祈り―1906―」　林竹治郎

美術館ニュース

北海道立近代美術館

北海道の美術'86—イメージ・群

2月6日(木)～3月2日(日)

「北海道の美術'86」は、選定委員会で選ばれた道内在住の作家が、同委員会によって呈示されたテーマに従って新たに制作した作品を展覧するもので、その中から道立近代美術館賞、優秀賞、新人賞が選ばれます。

これまで、「北方のイメージ」「イメージ・道」「イメージ・水」のテーマで開催され、第4回目を迎えた今年のテーマは、「イメージ・群」です。

日本画、油彩、版画、彫塑（立体構成を含む）、工芸、映像、その他の造形など多岐にわたる分野の道内78作家による「イメージ・群」を紹介するとともに、本道美術界の現状を知る上でも恰好の展覧会といえるでしょう。

なお、受賞作品は以下の通りです。

◦北海道立近代美術館賞
「コンポジション—リンゴ—」（油彩）
栃内　忠男

北海道立近代美術館賞
「コンポジション—リンゴ—」
栃内　忠男

◦優秀賞
「作品85—11・群」（油彩）
米谷　雄平

◦新人賞
「作品85—11」（彫塑）
楢原　武正

北海道立旭川美術館

子どもと親の美術館'86　ゆめ？まぼろし？

——幻想への招待——

北海道立近代美術館の企画による「子どもと親の美術館」シリーズは、楽しみながら美術のさまざまな要素を学ぶことができるユニークな展覧会として全国的に高い評価を得ています。道立旭川美術館ではこの展覧会を道北地方の人たちにも観賞していただこうと、昭和59年度から巡回展として開催してきました。これまで「自然の色・心の色」、「学ぶ・創る」を開催し、今回は第3回目にあたります。

今回は「ゆめ？まぼろし？——幻想への招待」というタイトルで、現実にはありえない出来事や目に見えない世界を描き出した作品によって、幻想と美術のかかわりをさぐります。内容は「不思議」、「不安」、「神話」、「メルヘン」の4つのテーマによって組み立てられていますが、それぞれにマグリットやダリといったシュールレァリズム「超現実主義」の作家たちの版画や、やはり日本においてその影響を受けた小川脩や福沢一郎の油彩などが出品されるほか、マックス・クリンガー、ジョン・マーチン、

「氷上のけものたち」 国松　登　1978年

ウィリアム・グレイクなど、ヨーロッパにおいて幻想美術の世界を開拓したすぐれた作家たちの版画も出品されます。このほか三岸好太郎、国松登、深井克美、田中忠雄、岩船修三らの絵画とともに、ガラス工芸なども出品され、バラエティーに富んだ出品内容になっています。

会場はこれらの作品のほかにテーマにそった写真パネルや解説がそえられており、理解を助けるようになっているほか、あそびのコーナーやスライド・コーナーでは実際に遊びながら不思議な体験を味わっていただけるでしょう。

美術館ニュース

北海道立三岸好太郎美術館

○好評のボランティア解説

先号でお知らせしたように、今年度から8～10月の3カ月間、予約団体入館者の方がたに、ボランティア解説員による作品解説を行なうことになりました。3カ月間に解説を受けられた方は30団体1,065名にのぼり、大へん好評でした。来年度も実施が予定されています。

○三岸節子さん来館

当館所蔵の三岸好太郎作品の大部分を寄贈された三岸節子夫人と長女陽子さん、次女杏子さんご夫妻が10月末に来道、当館協議会に出席されたほか、知事との夕食会、ボランティア解説員との懇談会にも出席されました。

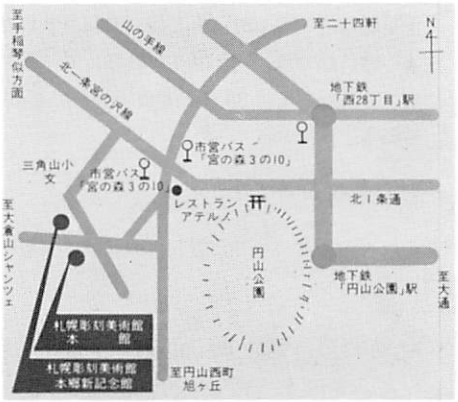
○三岸好太郎作品選を刊行

しばらく品切れのためご迷惑をおかけしていた所蔵品目録が、このほど装いを新たに当館友の会より刊行されました。『三岸好太郎作品選』と題した今回の目録は、昭和58年に刊行された詳しいデータ付きの目録のいわば普及版で、32点のカラー図版と、好太郎の画業、著述文再録、年譜などが収められています。1冊1,500円で販売されています。また、<オーケストラ>の絵はがき4枚セットも新しく特製袋入りで発売中です。

ボランティア部員の作品解説

財団法人 札幌彫刻美術館

財団法人札幌彫刻美術館は、札幌出身の彫刻家本郷新が、札幌市内のアトリエギャラリー及び作品の寄贈を申し出て、それを受けるかたちで寄贈されたアトリエを記念館とし、隣接地に本館を建設、1981年6月29日オープンしましたが、本郷新はオープンをまたず前年2月13日他界しました。彫刻家本郷新は、生涯にわたり全国50数ケ所にモニュメント（記念碑）彫刻と450余点の彫刻作品を制作しました。現在当館には、彫刻403点、絵画303、点の他制作道具・生活用品・図書を収蔵展示しています。このような本郷新の常設展示の他に様々な企画展も年に数回開催しています。1986年度には、6月4日～7月6日にかけて開館5周年記念として『今日の金属造型展―日本とドイツの作家達―』を開催します。この企画展は、金属を素材として表現する造型芸術の国際交流展として、日本とドイツの作家約40名から出品を予定しています。この他に本郷新と交流のあった白石斎氏による陶芸展（7月8日～7月27日）、隔年で開催している『北の彫刻展』（7月29日～9月7日）を予定しています。『北の彫刻展』は今年で3回目をむかえ、市民にも徐々に浸透しつつある催しで、北海道に在住し活躍している彫刻家を招待し、自由な発想で制作された作品を具象・抽象を問わず紹介する場を提供しています。特に野外にも作品



が展示できる庭園がありますので、毎回ユニークで興味深いものとなっています。本郷新自身作品の多くが全国各地にモニュメントとして野外展示してあり、野外彫刻という言葉自体当館の特徴の1つとなっています。

このような企画展以外には、本館ロビーを利用したコンサート等、あるいは彫刻めぐりも実施しています。なかでも、本郷新の命日2月13日には、石狩浜に設置された「石狩」の像を訪ねる彫刻めぐりが毎年実施しており、故人をしのぶ行事の1つ「抜海忌」として定着しつつあります。

当館は、札幌市内でも自然に恵まれた環境にあり、故人の遺志である気さくで親しみやすい美術館を目指してゆきたいと思っています。

予算報告

1　60年度（4月～12月）各会計の収入状況は次表のとおりである。

区　　別	一般会計	売店会計	駐車場会計	合　　計
	千円	千円	千円	千円
60年度(4～12)	7,047	22,810	13,761	43,618
59年度(4～12)	6,522	22,529	14,232	43,283
差　　額	525	281	Δ 471	335
前　年　比	108.0%	101.2%	96.6%	100.7%
60年度予算	9.920	23,420	16,109	49,449
差　　額	Δ 2,873	610	Δ 2,348	Δ 4,611
予算達成率	69.9%	97.3%	85.4%	88.2%

注1　一般会計は、前年度実績を8％上廻ったが予算額に対しては約70％となっていて今後努力が必要である。

注2　売店会計は、前年度並で当初目標を上廻る見込みである。

注3　駐車場会計は、前年度より若干下廻ったほか予算額に対しても85.4％と低く減収が予想される。

注4　合計額では、前年度並に推移しているが、当初予算に対しては88.2％で今後努力が必要とみられる。

2　一般会計収入

この収入の主体である会費収入の状況は次表のとおりである。

区　分	収入済額			目　標	
	60年12月	59年12月	差　額	予算額	達成率
	千円	千円	千円	千円	%
法人会員	1,080	990	90	2,070	52.2
個人会員	4,480	4,098	382	5,780	77.5
賛助会員	303	315	Δ 12	400	75.7
計	5,863	5,403	460	8,250	71.1

注1　合計をみると前年度との比較で460千円の増収となったが、今年度目標に対しては71％と低く、今後法人会員の勧誘に力を入れる必要がある。

注2　会員の動向は下表のとおりである。

会員種別	60年3月末在籍	60年12月末在籍	差引増	4-12月の動き		新入会員目標数
				入会	退会	
法人会員	40	43	3	5	2	20
個人会員	536	617	81	124	43	150
学生会員	113	109	Δ 4	101	105	17
計	689	769	80	230	150	187

3　売店会計収入

月別の売上状況は次表のとおりである。

月別	総売上	特設売上(左の内数)	特別展名（開催期間）
	千円	千円	
4	1,105	2,171	国松登展（4/13～5/12）
5	1,672		
6	3,287	2,004	サントリー美術館長(6/2～7/7)
7	3,379		エルミタージュ美術館展(7/13～8/22)
8	4,708		
9	4,247	2,582	現代ガラス展（8/31～10/6）
10	2,037	408	海浜のキッチュ（10/16～11/17）
11	1,097		
12	1,278		
計	22,810	7,165	

注　売店収入は特別表の入館者数によって大きく左右されますが、本年は国松登展にはじまり何れの展覧会も好調で、特に「エルミタージュ美術館展」は15万人を超える観客があり増収となった。

4　駐車場会計

駐車場の利用状況は次表のとおりです。

区　分	時間貸			特別貸	合計額
	入館者	一　般	計		
60年度（4月～12月）	(21.057台) 千円 3,299	(7.702台) 千円 2,810	(28.759台) 千円 6,109	(月平均70台) 千円 7,625	千円 13,734
59年度（4月～12月）	(19,288台) 千円 3,026	(8,904台) 千円 3,355	(28,686台) 千円 6,381	(月平均70台) 千円 7,851	千円 14,232
前年比	109.0%	83.8%	95.7%	97.1%	96.5%

注1　時間貸の入館利用者が前年度を9％上廻ったのは「エルミタージュ美術館展」に多くの入館者があったことによる。

注2　時間貸の一般利用者及び特別貸は前年度に比べいづれも若干下廻った。

注3　当初予算額は16,084千円で若干の減収が見込まれる。

事務局だより

業務報告

1　婦人美術講座の開講

第８回婦人美術講座（定数50人）が６月19日から12月４日まで６ケ月間延20回行なわれました。長期の研修ですが、万難を排して熱心に聴講した人が多く皆勤者14名、１回～３回欠席者13名を含め修了証書の交付を受けた方は37名でした。

ボランティア部への入部希望者は現在売店係が12人、解説係が11人で目下実践のための新人研修(講義と実習)が行なわれているところです。

開講式（市川副会長）

2　身体障害者を近代美術館に招待

(1)　道立身体障害者リハビリテーションセンター（美唄市）の入所者42人、職員15人の方々を10月24日に道立近代美術館に招待し、常設展及び特別展（海浜のキッチュ展）を観賞していただきました。

バス２台に分乗して来館、美術館職員及びボランティア部員等による解説と車椅子の方々への介護があり、また、当会からは飲み物の差し入れと記念品として絵はがき（３枚１組）を全員に贈りました。

(2)　北海道札幌高等聾学校（小樽市銭函）の生徒107名、教員50名の方々を11月２日に前記同様に招待しました。

当会からは、交通費の一部助成（２万円）と絵はがき（３枚１組）を全員に贈り、また学校図書館用として展覧会図録５種を寄贈しました。

リハビリテーションセンター入所者の観覧

高等聾学校生徒の観覧

事務局だより

業務報告

3　会員のつどい

第３回会員のつどいは12月３日道立近代美術館で行なわれました。参加者は、会員177人、作家19名、美術館関係者等44名の計221名でした。

まず、17時20分から、１時間にわたり道立近代美術館長倉田公裕氏の講演「日本の美のこころ」がありましたが、満席の聴講者を前にスライドを十分に使い解りやすくしかも内容の豊富なお話で一同大きな感銘を受けました。

次に16時30分から道立三岸好太郎美術館長工藤欣也氏の乾杯の音頭がありカクテルパーティーに入りました。宴席では作家諸先生及び各美術館職員等の参加もいただいており、会員との交流もあちこちで盛んに行なわれました。

次いで、会員の皆様が待望の「お楽しみ抽選会」に入り、会の盛り上りは最高に達した感がありました。そして20時になり別れを惜しみながら帰途についたのでした。

この催にご協力下さった、近代美術館、作家諸先生並びに取引き企業の方々に厚くお礼を申し上げます。

4　道立近代美術館の予算陳情

田上会長及び平瀬理事が道立近代美術館協議会委員の方々と合同で同館の61年度予算の増額等を陳情し、善処の回答をもらいました。

陳情年月日　61年１月16日、18日

陳　情　先　道議会（自民党及び社会党政策審議会長等）、道副知事

陳情事項　①作品収集費3,000万円の増額
②第２収蔵庫建設費２億1832万円の確保

館長講演を熱心に聴く参加者

パーティー（乾杯の準備）

お楽しみ抽選会（当り券を持って）